

序文

早稲田大学エジプト学研究所の紀要「エジプト学研究第21号」が発行される運びとなりました。若干発行が遅れましたが、執筆者の皆さんの力作を読むことができるとても嬉しいです。

それにしましても、論文が1点、しかも外国の方というのがとてつもなく悲しいですね。調査報告が少ないのは調査そのものがエジプト国内の政治の混乱の影響を受けますから仕方がないわけですが、論文がないのはいかなものかと思います。ただ研究ノート、修士、卒業論文概要が4点あるのが若干の救いです。しかし毎回書いていますが、これでいいのでしょうか。私たちは研究者のプライドを捨ててしまったのでしょうか。それとも研究者でなくなってしまったのでしょうか。きっと日々の生活が雑事で忙しくてとてもそこまで手が回らないというのが本当のところでしょうが、そこを何とかするのが研究者ではないかと思うのです。もし皆さんが研究者をやめるというのなら、この紀要を出すのをやめてもいいのではないかと思っています。編集をしてくれている人も嫌になってしまうのではないかと思いますから。若手に執筆のチャンス差し上げようとの思いでこの紀要を始めたのですが、そういう心遣いはいらぬという若手の要望でしたらやめます。私たちの紀要はなあなあのもではなく、査読してくださっている先輩方も一生懸命に見てくださっています。

エジプトの国内混乱は日本のマスコミの取り上げ方に偏重がありますので、ニュースの報道通りではありませんが、やはり気をつけた方がいいとは思いますが、それだからこそ紀要に論文や研究ノートを出す意味があるわけです。もし若手にその気がないのなら方法を考えなければなりません。是非若手研究者の皆さん真剣に考えて下さい。私は今すぐでもこの紀要をやめる決定をするのは容易いことですが、それではあまりにも悲しすぎるのでこの文章を書きました。ともかく研究者なら研究者としての覚悟がほしいです。

吉村 作治

早稲田大学名誉教授
東日本国際大学副学長